

沼津市若山牧水記念館

第26号 2001. 3. 15

編集・発行 沼津牧水会 TEL・FAX (0559) 62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 E-mail:bokusui@thn.ne.jp



ひとの世にたのしみおほし然れども 酒なしにしてなにのたのしみ 牧水

大正九年八月十五日に、牧水一家が沼津へ引き移って来たことは、よく知られている。しばらく上香貫に住んだのち、大正十三年夏からは、昭和三年に亡くなるまで、千本松原に添ってというか、まるで松の木の間存分に浸って暮らしていたかのようであった。

その頃の沼津の街は、街の真ん中を流れる狩野川の岸に魚市場や船着場があつて、伊豆からの物資の集散地としてマユ、薪、木炭、ミカン、米などの荷揚げ荷おろしに馬車が行き交ひ、伊豆の温泉や観光に発着する船の出入りで大層なにぎわいを見せていた。牧水が未だ東京にいた若いころ、友人と土肥温泉に遊びに行こうとして、この狩野川の湊より出航した。その時に、はからずも千本松原を見て、その美しさに驚いた、ということである。

さて、この狩野川より本町一帯には、一流のお茶屋(料亭)が多く集つていた。臨川閣大松、開花楼、湖月、浮影楼、寿々喜、大宮、久の家などなど。牧水は、二年三年と沼津に住みつこううちに、遠来の客の接待やら自身の気散じに料亭での宴を張ることも多かつたという。こういう時の牧水は、まったく遊蕩的でもなく、粋とか、通とかというのでもなかつた。華やかで、のびのびとした清遊で、にぎやかな会話や短歌の朗詠、お客には民謡を唄わせるなど楽しいお座敷であつたらしい。芸者さんも、女給さんも、そして遠来のお客さんも、みんな良い心持に酔つて楽しむ。独特

の人氣者であつたという。

牧水はこれらの料亭のうちでも「湖月」をよく訪れたそうだが、ここを気に入つた理由が二階から眺める狩野川の豊かな水の風景であつたという。その「湖月」の主人芹沢茂作さんに請われて書いたのがこの半切である。「湖月」は、昭和十七年頃まで営業していたが、戦争が激しくなると海軍の寮として接収され、二十年七月の沼津空襲で焼失した。戦時中この半切は他の家財道具とともに疎開し、幾度かの引越越しを経て無事残り、現在ご子息の芹沢和夫さん(沼津市南本郷町)のもとで大切に保存されている。

牧水の酒は、綺麗で、他人の悪口や愚痴や、卑猥な言葉など一度も聞くことはなかつたという。自由で、おおらかで、野放図に飲んだ酒かと思えてそうではなかつた。私には、牧水が倫理的な責任感や自制心が人一倍強く、いつも反省していた人のように思えるのである。

なにものにか媚びてをらねばたへがたきさびしき故に飲めるならじか

酔ひぬればさめゆく時のさびしさに追はれ追はれてのめるならじか

しづしづと天日のもとに生くことの出来ねばこそあれ酔ひどれて居る (『白梅集』所収)

なお、この歌を所収する歌集『くろ土』では「人の世……」と「ひと」が漢字で、当館で展示している半折も「人」と漢字で書かれている。

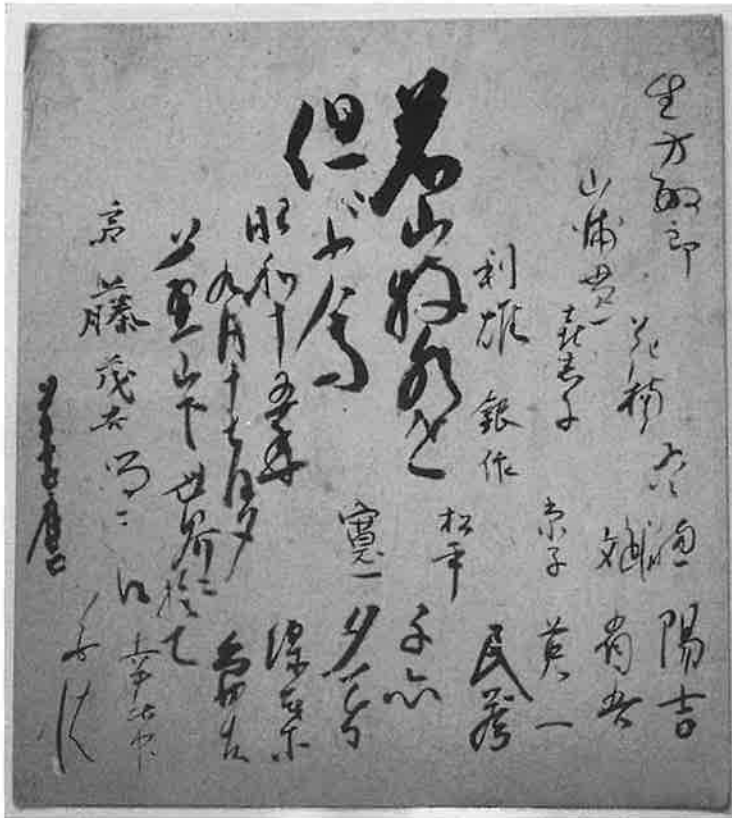
(社)沼津牧水会理事 川口和子

牧水十三回忌記念寄せ書き

(独)沼津牧水会理事 須永秀生

牧水の十三回忌法要は、昭和十五年八月十七日に沼津の乗蓮寺で盛大に行われたが、この会に参加できなかった東京在住者や、もう少し名残を惜しみたという有志が集って、命日の九月十七日に東京小石川の傳通院で再度の十三回忌法要が行われた。

朝からの雨もやんで、喜志子夫人、次男の富士人さん、長女の岬子さんから親族をはじめ、多くの歌人や文人が集まり、「古松院仙譽牧水居士」の位牌の前で法要が行われた。後にあげる名前の方以外に、四賀光子・尾上柴舟・矢代東村・村井武・今井邦子・高橋希人等が参列していた。法要終了後、更に別



まず、左端の善磨は土岐善磨である。善磨は歌集『Nakitarai』で知られる歌人で、ローマ字の普及に尽くした。その右の斎藤茂吉はアララギ派隆盛の原動力となった大歌人。当時青山脳病院の院長であった。『アララギ』の発展のために牧水を攻撃したが、牧水没後、希有の歌人と称えたと いわれる。左下は北原白秋。射水とも号し、牧水・中林蘇水とともに早稲田の三水と称された白秋は、終生の友として牧水を助けた。牧水と善磨・白秋は早稲田英文学科の同級である。

た。法要終了後、更に別れがたい何人かが言い出し、北原白秋・太田水穂・土岐善磨・佐藤緑葉・前田夕暮・山本鼎らが発起人となって、「若山牧水を偲ぶ会」として、上野公園園の「世界」という料亭で追悼の晩餐会となった。牧水の思い出話に盛り上がったというその会で、記念の寄せ書きをと書かれたのが上掲の色紙である。没後十二年経つても牧水の業績、人間性を偲ぶ人の多さに感動する。会の様子を思い浮かべてみたい。右端は西村陽吉。

東雲堂書店の養子となり出版業にも携わり、文学者の出世を助けた。『一握の砂』『別離』『桐の花』『馬鈴薯の花』『赤光』などの歌集を出版したことで知られる。牧水に文学雑誌『創作』の編集を委ね、世に出る緒を与えた。歌人としては自由律短歌の推進者として力を尽くした。短歌の貴族性を否定、民衆の手による平俗性を主張したことは短歌史に残ろう。当時は口語歌誌『芸術と自由』を発行していた。

その上は窪田空穂。あらゆる分野の文学に精通し、その影響を受けた文人は俳句の水原秋桜子、短歌の善麿・篤二郎・英一・渡辺順三・千家元麿・半田良平・川田順、小説の村松梢風など名をあげれば切りがないだろう。牧水・白秋とは明治四十一年の紫明社の『婦人くらぶ』の編集にあたった際、この紫明社で知り合った。空穂は追悼文の中で「私は若山君といふ人は、いかなる場合にでも、根本の信じられる人に思へた。少しの不安もなく信じられる人に思へた。」と書いている。

その左が山崎斌。文人で、小諸の田村病院で療養中の牧水と、後に『路上』の口絵を描いた画家山本鼎の信州大屋駅近くの家で出会った。牧水も貧しかったが、山崎は更に貧しく流浪の人で、牧水の死の直前まで付き合った。京子は水町京子。高知の人。釋、遙空に師事。当時は、歌誌『遠つび』を主宰していた。『創作』に南ゆかりの名で作品を出したこともある。右上の生方敏郎は群馬県の人。随筆家として著名で、特に『哄笑・微笑・苦笑』はその二ヒルな視点からかなり評判になった。東京朝日新聞・早稲田文学・やまと新聞・大正日々新聞などの記者を歴任。やまと新聞の頃、記者を公募したところ、合格したのが牧水だったという。そのテストの一つは、

新橋きつての料亭「花月」の女将の談話をとつて来るといふものだった。その難問を紺紵の浴衣に小倉木綿の白つばい袴、そして素足に尻切れ草履で見事に果たした、と生方は追悼文の中で書いている。

次は大悟法利雄。牧水の高弟で生前から牧水の家を守り立て、牧水の顕彰に生涯を尽くした歌人であり、沼津市若山牧水記念館の初代館長でもある。喜志子の左下の銀作は長谷川銀作。静岡市に生れ、喜



昭和15年8月 牧水13回忌法要記念 千本浜公園歌碑前

志子の妹潮みどりと結婚。『創作』の編集に長くあたった。当時は日本鉄道事業株式会社社長でもあった。十三回忌では親族代表として挨拶をしている。

喜志子の右の中島花桶、右上の山浦貫一、銀作の下の大橋松平、その左の杉本寛一は、いずれも「創作」の社友である。大橋松平は昭和六年に改造社に入社、『短歌講座』『新万葉集』の編集に携わり、戦後、雑誌『短歌研究』の編集者となった。もう一人の山浦貫一は信州の青年。山本鼎を通じて牧水と知り合ったという。牧水が千本に豪邸を建てたことに對して、沼津御殿と誹謗した。しかし、牧水には心酔し、追悼文の中で「文人歌人は兎もすれば所謂不道德を何とも思はぬ、いや思ふ事を意識的に恥づる様な傾向がともすればある。牧水は其の意味に於て道德的であつたと思ふ。成程借金もしたらう。いろいろのこともあつたらう。然し牧水は道德を感じる神経を蔽存させて居た。だから一面常識的であつた。常識が走ると計画を立てた。その計画が算盤に乗らなかつたとしても、彼を傷つける材料には決してならない。」と書いて、この酒仙をなつかしんだ。

署名が判読できないのは二名。斎藤茂吉のすぐ下の名。私は篤二郎と判読したが、篤二郎とすれば尾山篤二郎で、この会の発起人の一人であり、国文学者・歌人として著名である。牧水危篤の報にかけつけた一人でもあり、追悼歌として「もはや駄目になりし時し醫師さへ酒を與へといひにけらずや」と歌つてその死を悼んだ。あと一人判らないのは下段左から三人目の名。文字の配置と筆跡から題字を書いた奔放な人のように思えるが、出席者名と併せて考えても思い当たる人がいない。

第五回若山牧水賞授賞式が平成十三年二月十二日、宮崎観光ホテルにおいて行われた。受賞者と受賞作品は、小高賢氏（五六）＝東京都墨田区Ⅱの歌集『本所両国』（雁書館刊）と、小島ゆかり氏（四四）＝東京都東村山市Ⅱの歌集『希望』（同）の二冊である。

今回は第五回を記念して「全国子ども短歌コンクール」が実施され、小学、中学、高校生の部に全国から七千七百三十三首の応募があった。各部門百首の入選作の中から選ばれた最優秀賞一首、優秀賞三首の表彰式も同時に行われた。

受賞者紹介



☆小高 賢（こだか・けん）

一九四四年東京都生れ。慶応義塾大学経済学部で近代日本思想史を専攻。七二年講談社の編集者として馬場あき子氏に会う。七八年『かりん』創刊に参加。

評論集に『批評への意志』、歌人研究として『近藤芳美』、『宮柁二とその時代』、編著『現代短歌の鑑賞一〇一』がある。

歌集『本所両国』から

身をまかせ流れたのしめ結論を追
わぬ生き方鴨を見習え

数字に頼る企業ではなく理想など
たたかわせたく照れくさくとも

この「その」は何を指すのか受験期
の娘にたださるるわれの時評は



小高賢歌集

第五回若山牧水賞受賞者決まる

☆小島ゆかり（こじま・ゆかり）

一九五六年愛知県生れ。早稲田大学在学中にコスモス短歌会に入会。九三年から一年間の滞米生活を経験。九七年、歌集『ヘブライ暦』で河野愛子賞を受賞。歌集はほかに『獅子座流星群』などがある。

現在、短大講師や「NHK歌壇」のレギュラー司会者を務める。



歌集『希望』から

月ひと夜ふた夜満ちつつ厨房にむ
りツむりツとたまねぎ芽吹く

二重險にあくがれわれを責めやま
ぬ娘らよ眼は見るためにある

温水の田螺おそるべし藻を食みて
じつと交みてぞくぞくと殖ゆ



「全国子ども短歌コンクール」の最優秀賞を受賞した作品

○小学生の部 山本幸恵（東郷町立東郷小学校五年）

負けたんだ徒走の時にライバルに自分が一番ライバルだけど

○中学生の部 松田幸己（延岡市立黒岩中学校二年）

桜咲く桜散ったよ桜舞う桜ふんだよ桜ごめん

○高校生の部 黒木雄仁（宮崎県立小林高等学校一年）

消しゴムはいろいろ消せて便利だが見えなものは消えてくれない